

令和 8 年度
秋季臨時大会プログラム
Autumn Conference 2026 Programme



開催日時: 2026 年 10 月 17 日 (土)
Date: Saturday, 17th October 2026

会場: 中央大学 茗荷谷キャンパス
(東京都文京区大塚 1 丁目 4-1)
Venue: Chuo University, Myogadani Campus
(Bunkyo-ku, Tokyo)

大会会場: 2 階 2E08 号室
Room: 2E08 (2nd floor)

[10 時 理事会 Board of Trustees Meeting (2E07 号室 room 2E07)]

13:00 受付開始

14:00 開会の辞 Opening Address
宮丸 裕二 (ディケンズ・フェロウシップ日本支部長)
Yuji MIYAMARU (President, the Japan Branch of the Dickens Fellowship)

会員集会 (諸報告) Members' Meeting

司会: 吉田朱美 (京都府立大学 教授)

Akemi YOSHIDA (Professor, Kyoto Prefectural University)

14:45～15:30

研究発表 1 Research Presentation 1

発表者: 杉田 貴瑞 (玉川大学 講師)

Takayoshi SUGITA (Lecturer, Tamagawa University)

「『クリスマス・キャロル』の大正期翻訳についての一考察」

'A Study of the Translations of *A Christmas Carol* in the Taishō Period'

16:00～16:45

研究発表 2 Research Presentation 2

松本 靖彦 (東京理科大学 教授)

Yasuhiko MATSUMOTO (Professor, Tokyo University of Science)

「片思いに殉ずる男たち

—シドニー・カートンとセブルス・スネイプ」

'Men Who Die for Unrequited Love:

Sydney Carton and Severus Snape'

16:45

閉会の辞 Closing Address

猪熊 恵子 (ディケンズ・フェロウシップ日本支部 理事)

Keiko INOKUMA (Board Member, the Japan Branch of the Dickens Fellowship)

17:00

懇親会 Convivial Party

会場: 同キャンパス内 地下食堂 Basement cafeteria

参加費 (事前申し込み・支払い) : 5,500 円

当日参加費 (席に余裕がある場合) : 6,000 円

大会出欠席と懇親会お申し込みはこちら↓

(10月7日までに参加の可否をご入力ください。また懇親会の事前予約も同日までです)

<https://forms.gle/6vqzLRzvnRZ9NHec9>



懇親会にお申し込みの方は、期限までにお振込をお願いいたします。お振込がありませんと参加申込が自動的に取り消されてしまいますのでご注意ください。

会場案内

中央大学 茗荷谷キャンパス

(東京都文京区大塚 1 丁目 4-1)

- ・ 東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷駅」で降りて、徒歩 1 分ほどです。
- ・ 新幹線で東京駅からお越しの方は東京駅から丸ノ内線に乗り換えてください。



- ・ 昼食は、駅周辺に、飲食店、ファミリーレストラン、コンビニエンスストアなど、じゅうぶんにありますので、ご利用下さい。

概要

Synopses

研究発表 1

Research Presentation 1

「『クリスマス・キャロル』の大正期翻訳についての一考察」

‘A Study of the Translations of *A Christmas Carol* in the Taishō Period’

杉田 貴瑞

Takayoshi SUGITA

明治期にディケンズの翻訳が始まって以降、前期作品を中心に様々な作品が翻案・翻訳された。なかでも『クリスマス・キャロル』は最も翻訳が試みられた作品と言えるだろう。しかし、翻訳技術の向上やイギリス文学の普及という背景とは対照的に、翻訳の活気あふれる明治期に比べて、大正期になるとディケンズ作品の翻訳は大きく数を減らしてしまう。そのような傾向にあっても、『クリスマス・キャロル』は翻訳が途切れなかった。そこで、本発表では、スクルージの人物像に着目して、翻訳における工夫を明らかにしていきたい。特に、スクルージのユーモアをどのように翻訳しているのかという点について、大正期の 2 つの翻訳作品を中心に考察したい。

研究発表 2

Research Presentation 2

「片思いに殉ずる男たち ―シドニー・カートンとセブルス・スネイプ」
‘Men Who Die for Unrequited Love: Sydney Carton and Severus Snape’

松本 靖彦

Yasuhiko MATSUMOTO

ハリー・ポッターのまなざしに浮かぶ（彼の母親）リリーの面影を、今際の際まで慕い求めたセブルス・スネイプ。愛らしいおでこ青い眼のルーシー・マネットの面影を胸に断頭台の露と消えたシドニー・カートン。前者に後者の影響を認めるのはたやすく、両者の共通点について考察したブログやオンライン記事は枚挙にいとまがない。個人的にもスネイプという人物の特異性がずっと気になっていたのも、この機に彼とカートンの愛し方、そして死に様を並べてみて、彼らが本当のところ何をしているのかゆっくり考えてみたい。結局は、自分が惹かれている彼らの特異性に焦点をあてることになると思う。ディケンズの『二都物語』とローリングの『ハリー・ポッター』を対照することで、それぞれの作品の魅力を際立たせることができれば幸いである。